

実践報告

## 最小限の体験を最大限に活かす実習の工夫

### —コロナ禍における臨地実習教育 第1報—

久留島 実姫\*

#### I. はじめに

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の流行拡大により、3回生の領域実習は遠隔での実施を余儀なくされていた。そのような状況下でありながら、2回生の生活行動援助論実習Ⅱでは、数日間ではあるものの、臨地に赴いて実習を行うことができた。本稿では、コロナ禍において本学初の臨地での実習を行った2回生の生活行動援助論実習Ⅱについて報告する。

#### II. 生活行動援助論実習Ⅱの実際

##### 1. 実習の概要

本実習は、2単位90時間の実習である。実習目的は、病院で療養生活を送る人々を全人的に捉え、科学的な知識と思考を用いて、人々に必要な生活行動の援助を実践するとともに、健康問題と看護について考察し、看護実践力の基礎を培うことである。実習内容は、初めて受け持ち患者を担当し、看護過程を実施することであり、入学から年前期までの学修の集大成となる。また、2年次後期の各領域の演習、さらには3年次の領域実習の起点として位置づけられる実習である。学生にとっては、ハードルが高い反面、臨地での体験により、学習意欲や、看護師という職業に対するコミットメントも高まることが多い実習である。

##### 2. 明るい兆し

5月21日に京都府の緊急事態宣言が解除され、感染者数が減少傾向となり、病院側から実習受け入れ再開の連絡を頂くようになった。さらに、6月から分散登校による対面講義も部分的に再開され、臨地での実習に明るい兆しが見え始めた。しかし、予定していた実習施設全てで受け入れが再開した訳ではなかったため、新規開拓も含め、受け入れ可能な病院で、対象学生全員の実習を可能とするために実習内容の変更を検討した。

##### 3. 臨地でしか学べないこと、学内でも学べること

実習内容を「臨地でなければ学べないこと、経験できないことは何か」という観点から検討した。その結果、看護過程の第一段階であるアセスメントに必要な情報収集を臨地での実習内容とし、「臨地でなければ学べない」患者とのコミュニケーション、カルテ等の閲覧、そして直接ケアの見学、一部介助を実習項目とした。

臨地で収集した情報は、学内実習で分析・解釈し、看護上の問題抽出、看護計画立案に繋がりたいと考えた。しかし、これでは看護過程の第三段階である看護計画の立案までを行ったに過ぎない。よって、感染予防に努めながら、実習室で学生同士をお互いの受け持ち患者に見立てて立案した看護計画を実施し、評価することとした。

\*京都看護大学

#### 4. 感染予防策

臨地での実習に際して最も危惧されたのは、実習施設にウイルスを持ち込むことであった。そのため学生には、自身の体調を毎日チェックすることに加え、実習委員長から看護学実習に関する感染症拡大予防のためのガイドラインの説明が行われた。また、大学からフェイスシールド、携帯用アルコール消毒剤、実習施設内で着用するマスクを配布した。

#### 5. 遠隔システムの活用

学生にとって、実習指導者から直接受ける指導が貴重であることは言うまでもない。特に、情報収集から看護上の問題を抽出し看護の方向性を見出す過程での指導者からの指導は重要であると考えている。そこで、大学で準備が進められていた臨地実習用の遠隔システムを使って、実習施設から指導を受けられるように準備を進めた。また、実習施設にも遠隔での指導をお願いした。

#### 6. 翻弄された実習

学生全員が臨地で4日間の実習をするために、前半と後半の2班に分けて実習を開始した。しかし、7月の後半はCOVID-19の第2波の影響が徐々に大きくなっていった時期であった。そのため、連日想定外の事態に見舞われ、予定していた4日間の臨地での実習は2日～3日になり、学内実習も遠隔での実習に変更せざるを得なくなった。

### Ⅲ. 実習の成果

#### 1. 学生の反応（抜粋）

学生から、「3日間ではあったが、多くのことを学ぶことができた」という反応が見られた。また、「患者さんとのコミュニケーションで困っていたが、カンファレンスで指導者さんからア

ドバイスをもって、実施したところ、患者さんの様子が変わった」、「コミュニケーションを通して、カルテでは分からない患者さんの温かさを知ることができた」など、実際のコミュニケーションを通じた学びを述べていた。

看護過程の展開については、「患者さんにとって何が必要であるのか、どのような援助が必要であるのかについて学ぶことができた」、「3日間の病院実習で得た情報を、学内や遠隔実習で整理、分析でき、なぜそのような身体症状が起っているのかを多方面から考えられた」ことを述べていた。

さらに、「指導者さんからの助言を頂き、自分が考えていなかった視点から疼痛緩和を考えることができた」などの反応があった。

#### 2. 指導者側の反応

指導者からは、「短期間の実習であったが、学生は良く考えていた」、「遠隔での機器類の操作には不安であったが、学生の考えを聞くことができ良かった」などの声が聞かれた。

### Ⅳ. 評価と今後の課題

学生の反応から、「臨地でしか学べない」と考えていた内容について多くの学びがあったことが伺えた。また、紙上患者ではなく、「自分で収集した情報」に基づいて看護過程を展開できたため、対象像をイメージしてアセスメントを行い、患者の立場や目線で必要な援助を考えることができたと思われた。このことから数日間ではあったが、臨地での実習成果は大きかったと考える。

一方、指導者からは機器類の操作の不安が聞かれたが、遠隔での指導に肯定的な反応であったと思われる。

周知の事実であるが、臨地実習という授業の場は、学生にとって学内の講義や演習では学べ

ないことを有形・無形に学ぶ機会に溢れている（安酸, 1996）。また、学生の立場から外山は、医学生が臨地（臨床）実習を、オンライン講義やレポートだけでは補うことのできない営みとして捉えている（外山, 2021）と述べている。そのため看護師を目指す本学の学生も臨地実習に対して同様に考えていると推察できる。

次年度も COVID-19 の影響があると考えられるため、本稿で述べてきた経験を活かし、第一に学生の臨地での学びの機会を創ることを優先して、実習施設と調整をしながら、準備を行う

必要がある。

#### 文献

- 外山尚吾 . (2020). コロナ禍における学生の教育参画 - そもそも論から考える . 医学教育 , 51 (3), 358-359.
- 藤岡寛治 , 安酸史子 , 村島さい子 , 他 . (1996). 学生とともに創る臨地実習指導ワークブック . 8. 東京 : 医学書院 .

